



第10回

— 企画展 —

東海道五十三次くらべ — 広重 VS 国貞 —



歌川広重「東海道五拾三次之内 日本橋 朝之景」
大判 天保4年(1833)頃 当館蔵



歌川国貞「東海道五十三次之内 日本橋之図」中判
天保7年(1836)頃 金馬車コレクション

向かって左が歌川広重、右が歌川国貞の作品です。2つの絵を並べた理由は、もうおわかりですね。国貞描く美人の背景に、広重の作品が引用されています。実は国貞の「東海道五十三次之内」(中判)は、56 図中 42 図に広重東海道の図柄が引用されているのです。2つを比較して見れば、国貞の絵を広重が真似したのではないことは、明らかです。この不思議な現象は、広重作の流行に乗じた国貞が、真似して描いたのだと信じられてきました。それだけ広重東海道の人気が当時から高かったのだ、と考えられてきたのですが…。

しかし、最近の研究によって、違う事情があったかもしれないことが分かってきました。国貞作の落款は「応需 国貞画」となっています。「応需」は「もとめに応じる」という意味です。なぜ国貞はわざわざこんな言葉を書き入れたのでしょうか？

現在、歌川国貞の知名度はかなり低いと思います。名前を聞いたことがある方でも、彼の作品を思い浮かべることができる方はごく少数でしょう。しかし江戸時代には、広重よりも国貞のほうが、人気も作画料も高かったのです。その国貞が得意としたのが浮世絵の主要商品である、美人画と役者絵。国貞東海道は、もしかしたら国貞の美人画人気にあやかって広重作を宣伝するため、版元なりが国貞に依頼をして描いてもらったのではないかというわけです。なるほど、それならば国貞の落款の謎も、不思議なくらい広重作を忠実に写していることも納得できるのではないのでしょうか。

※これらの作品は、平成18年7月21日(金)からの企画展「東海道五十三次くらべ—広重 VS 国貞—」前期に出品されます。

(学芸員 津田 卓子)

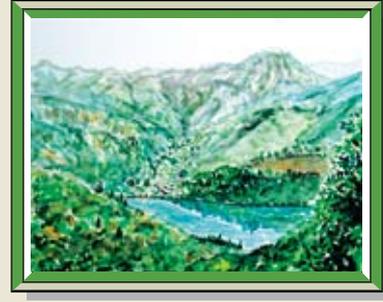
「趣味の二人展」

元校長の2人が退職してからも「お互いの趣味を生かして制作に励み、地域の子どもたちに頑張っている姿を見せることにより、恩返しができるらしいな」と、始めてから3年が経ちました。「那珂川町の良さを再発見してほしいです」と話していました。

県花の彩 碓井正和さん(那須烏山市)



ミニギャラリー



新緑只見 川上幸男さん(馬頭)